✦ 奥田あやと囲碁体験 ✦

指導者も必読！ ゼロから分かる

入門エッセンスセミナー

奥田 あや 三段

time 4

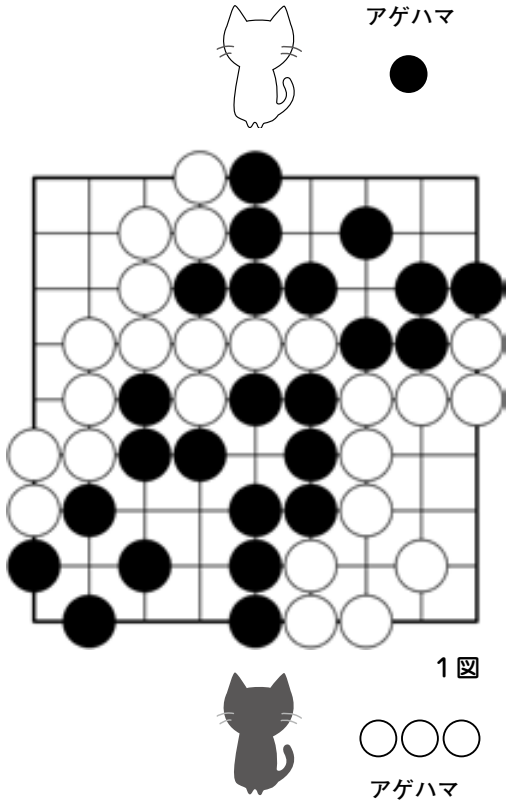
こんにちは。まずは前３回の内容を、簡単に振り返っておきましょう。

前回までのおさらい

まずは**１図**をご覧ください。これは囲碁の対局が終了（終局と呼びます）した場面の一例です。

囲碁は「囲った陣地の多い方が勝ち」というゲームで、その陣地（地と呼びます）の大きさは碁盤の縦線と横線が交わった交点を単位として数え、その単位を「目（もく）」と呼びます。

従って１図の場合、黒地が16目で白地が17目――従ってこのままだと「白の１目勝ち」となるのですが、囲碁には相手の石を取ったり取られたりという行為があり、そ



１図

Profile おくだ　あや

東京都出身。大淵盛人九段門下。平成16年入段。23年三段。東京本院所属。第27期女流本因坊戦挑戦者決定戦進出。第22期女流名人戦リーグ入り。第４回大和証券杯ネット囲碁レディース準優勝。

の戦いの中で取った石（アゲハマと呼びます）で終局後に、相手の陣地を埋めることができるのです。

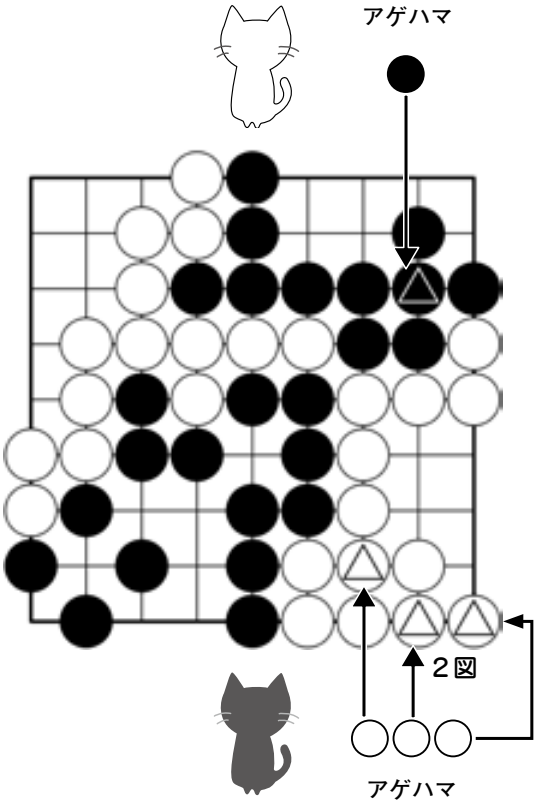
そして１図の場合は碁盤の上下に絵で記してあるように、黒が白石を３個、白が黒石を１個取っています。よってこのアゲハマで相手の地を埋めることになり、その結果が**２図**です。

白地が17目－アゲハマ３個＝14目、黒地が16目－アゲハマ１個＝15目というように計算します。従ってこの碁の結果は「黒の１目勝ち」――盤上だけでは勝っていても、アゲハマの数によっては勝敗が逆転することもあるということです。

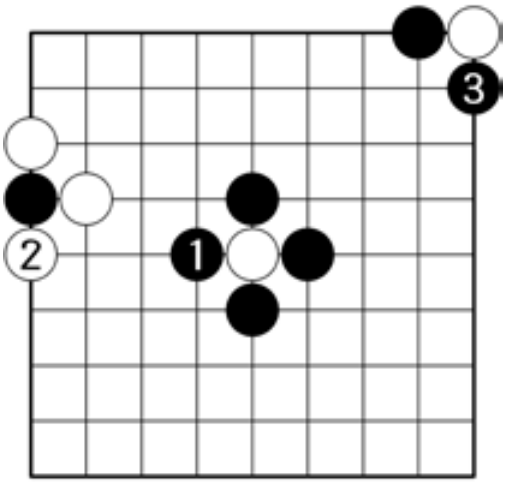
そして「では実際、どのようにアゲハマが発生するのか」＝「石の取り方」についてですが、**３図**の黒１と白石に密着する４箇所をすべて打てば、この白石を取ることができます。盤の端なら白２や黒３と３箇所や２箇所で済ませられることも。

また取る石は一つとは限らず、**４図**の黒１のように、相手の石を一気に二つ取ることもできます。白２なら三つ、黒３なら四つを一度に取ることができるわけですね。

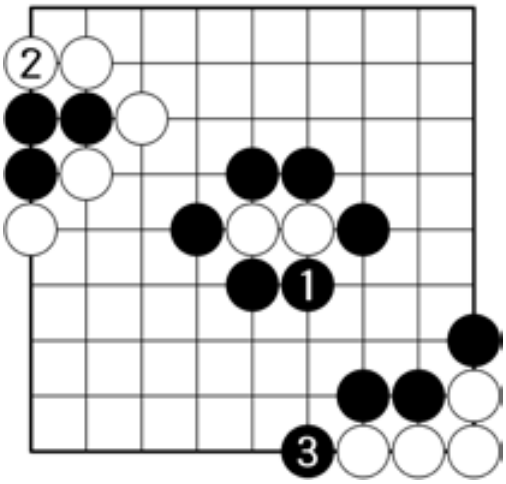
このように相手の石を取ることを「ポン抜き」と呼びます。また石の個数を数える単位を「子」と呼ぶので、黒１は「白二子をポン抜く」――略して「二子抜き」、白２は「三子抜き」、黒３は「四子抜き」と表現することになります。



２図



３図

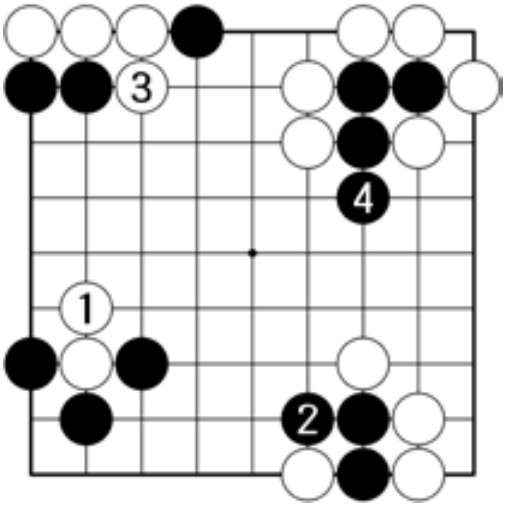


４図

さてここまでは「石の取り方」をおさらいしてきましたが、囲碁とは「交互に一手ずつ打つゲーム」です。従って一方が「取るぞ」と言ってきたら、相手は当然、それを防いでくるでしょう。というわけで、次は「石の逃げ方」についてです。

あと一手で取られるという状態を「アタリ」と呼びますが、**5図**はいずれも、そうしたアタリの状態です。

アタリにされている側は当然、取られたくないわけですから、白1や黒2、白3や黒4のように逃げることができます。このような「石の逃げ方」についてお話ししたところまでが、前回の内容でした。



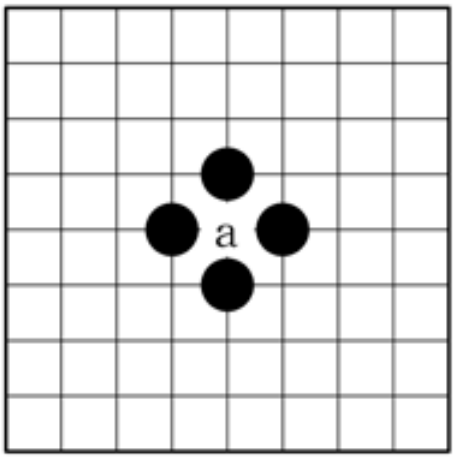
5図

「着手禁止点」について

以上「石の取り方および逃げ方」を踏まえた上で、今月の本題に入ります。

囲碁とは原則的に「盤上のどこに打ってもいい」というゲームです。しかし例外的に「打つことができない箇所がある」というお話です。

6図をご覧ください。皆さんもうご存知のように、白一子をポン抜いた形で、囲碁用語では「抜き跡」と言います。

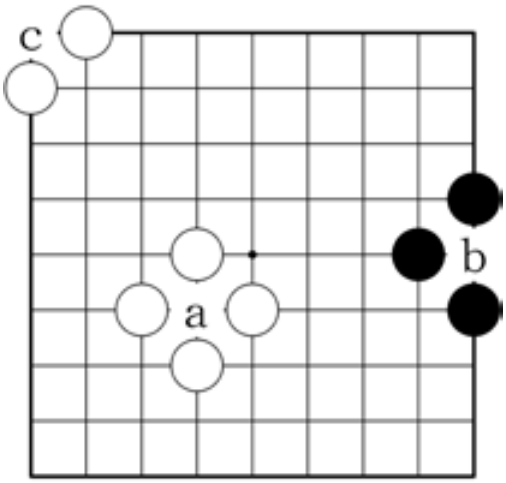


6図

そしてこの「抜き跡」に、白からaと打つことはできません。打った瞬間に取られる形となっているからです。従ってこのaの点を「着手禁止点」と呼びます。

同じ理由で、**7図**のa、b、cも、それぞれ「着手禁止点」となることは、もうお分かりいただけるでしょう。

ただし、着手禁止が適用されるのは「取られてしまう側」――7図のaで言えば黒の側だけであって、白がaと打つことは禁止されていません。打っても取られることはありませんから。



7図

続いては**8図**です。

このような形において、白がａやｂと打つことは可能です。打ったとしても、その瞬間に自分の石が取られてしまうわけではありませんから。

ただし**9図**のように、黒の腹中に白一子が入っている状態において、もう一つ白ａと打つことはできません。これは「着手禁止」です。

理由はもうお分かりですね。白ａと打った瞬間に、白二子が取られる形になってしまうからです。

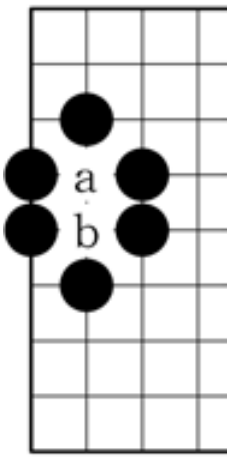
同様の理由で――、

10図　白がａやｂ、ｃと打ったり、黒がｄやｅと打つことはできますが、

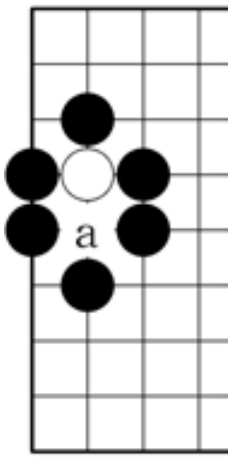
11図　それぞれこのように石が加わると、白がａと打ったり、黒がｂと打つことはできなくなります。

さて「着手禁止点」については、ご理解いただけたでしょうか？　石が取られてしまう箇所に、自ら突っ込むことはできないということですね。

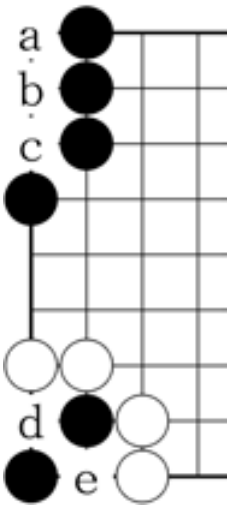
ただし、この「着手禁止点」にも例外があります。そのお話を次ページで。



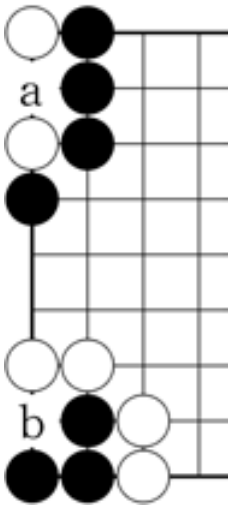
8図



9図



10図



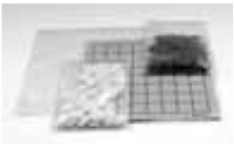
11図

＊＊＊九路盤セットと十三路盤セットのご紹介＊＊＊

十九路盤のセットはお近くのおもちゃ屋さんや、小売店などで比較的簡単に購入できるが、九路盤や十三路盤セットとなると、店頭でみかけることは難しい。東京、大阪、名古屋ならば、日本棋院の東京本院、関西総本部、中部総本部があるのでぜひ一度足をお運びいただきたい。

遠方の方にご利用いただきたいのはインターネットを使った日本棋院オンライン囲碁ショップや、電話注文・FAX注文対応の通信販売である。

写真❶の九路盤セット（￥1,470）は、裏は七路盤として、また写真❷の十三路盤セット（￥5,250）は裏は九路盤としても使え、さらに携帯性も抜群でお値段も手ごろ。まさに囲碁の入門キットとしてはうってつけの人気商品だ。


❶九路盤セット ￥1,470

❷十三路盤セット ￥5,250

●本院
千代田区五番町7-2
ＪＲ・地下鉄市ヶ谷駅より徒歩1分

●八重洲囲碁センター
中央区八重洲1-7-20　八重洲口会館９Ｆ
（東京駅八重洲地下街直通）

●関西総本部
大阪市北区角田町１番12号
阪急ファイブアネックスビル６Ｆ

●中部総本部
名古屋市東区橦木町1-19

●日本棋院通信販売センター
TEL　03-3288-8788（平日9:00～17:00）
FAX　03-5275-6844（年中無休 24時間受付）

●日本棋院オンライン囲碁ショップ
http://www.rakuten.co.jp/nihonkiin/

「着手禁止」の例外

12図　白ａとは打てないのですが、周囲の状況が変わって――、

13図　このような形になると、今までは打つことができなかった白１に打つことができるのです。

なぜだがお分かりになるでしょうか？

それは「△二子を取ることができる形だから」なのです。

つまり――、

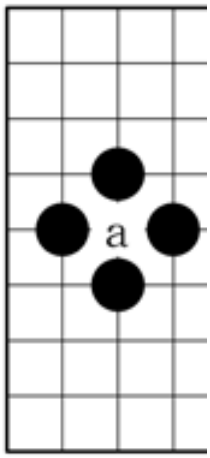
・相手の石を取ることができる場合のみ、本来は着手禁止である所にも打つことができる

ということなのです。

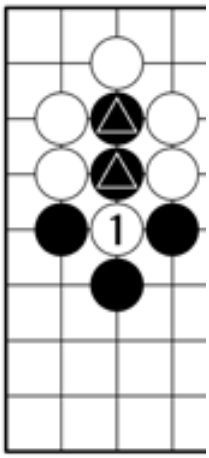
同様の理屈で、**14図**の白１や黒２と打つことが可能ですし、**15図**の黒１と打つことも可能です。

ひるがえって**16図**の場合は、黒ａとは打てない理由もお分かりでしょう。ｂの地点が空いているため、黒ａと打っても白を取ることができないからですね。

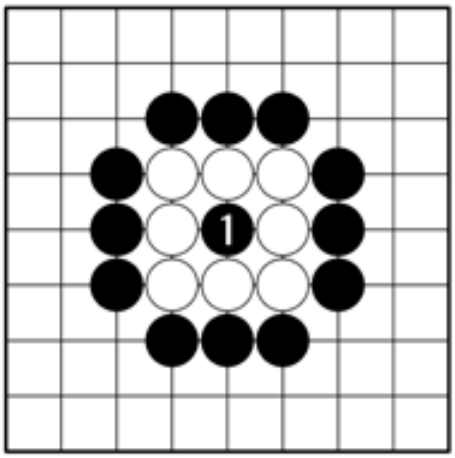
まず黒ｂと打ち、それからなら黒ａに打って白八子を取れるということです。



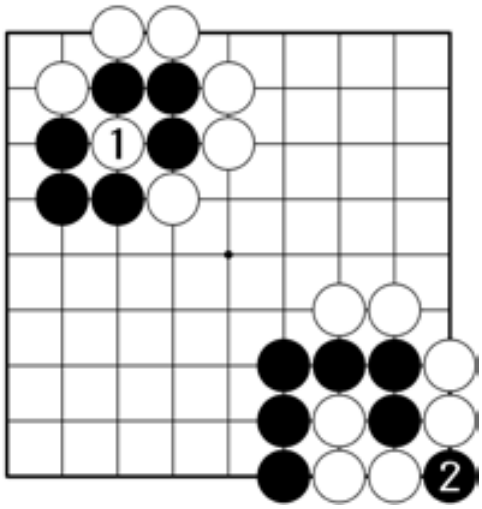
12図



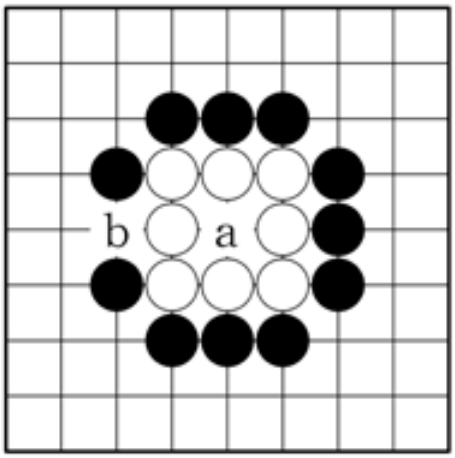
13図



15図



14図



16図

取ったり取られたり

17図をご覧ください。そして黒と白、双方の立場で、どう打てばいいかを考えてみてください。

ではまず、黒の立場から。**18図**です。

黒１と打てば、白一子をポン抜くことができます。もちろん黒の成功。

では一方の白の立場で。**19図**です。

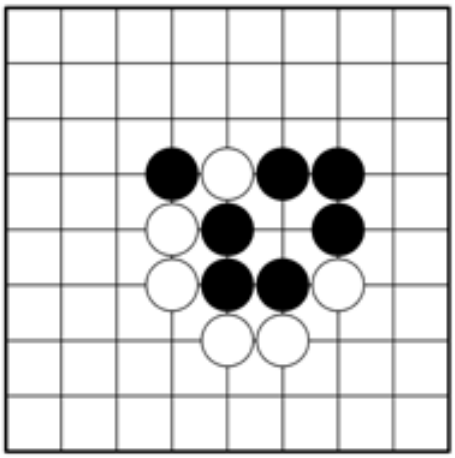
白１と打ち、黒三子をポン抜くことができました。もちろん大戦果です。

というわけで17図は、双方の石が「アタリ」の状態になっていたわけですね。非常に重要な場面だったということです。

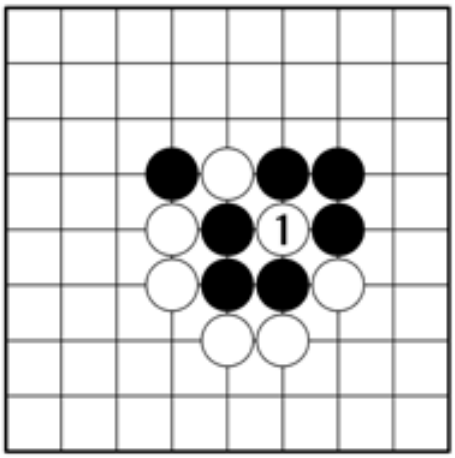
このように「双方の石がアタリになっている状態」は、こののち皆さんが実戦を経験していく中で、当たり前のように出現してくるはずです。そしてアタリになっていることに気付かず見過ごしてしまうということも多発するでしょう。

即ち「アタリに気付くかどうかは非常に重要」ということで、次の練習問題に挑戦してみてください。

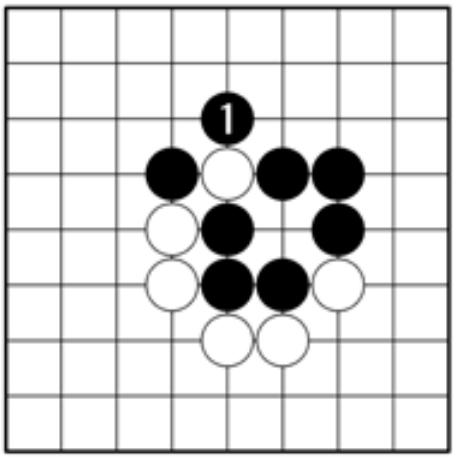
問題１　やはり黒白双方の立場で。



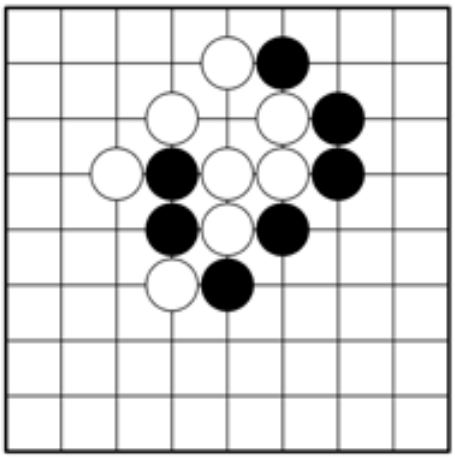
17図



19図



18図



問題１

解答１の１　黒が打つなら１の四子抜きです。石を取れるので、着手禁止ではありません。

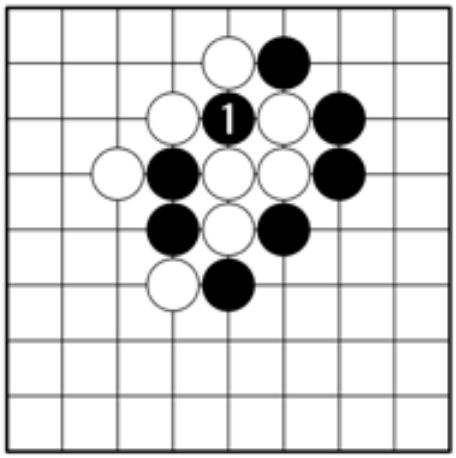
解答１の２　白が打つなら１の二子抜きです。黒からの四子抜きを防ぐだけなら、白ａでもその目的を達成することはできますが、どうせなら白１と、相手の石を取りながら四子取りを防いだ方が効果的であることは言うまでもありません。

このように「互いの石を取ったり取られたり」は、囲碁の対局における最大の醍醐味の一つです。石を取れれば嬉しいですし、取られれば悔しい――こうした一喜一憂は当然の感情と言えるでしょう。

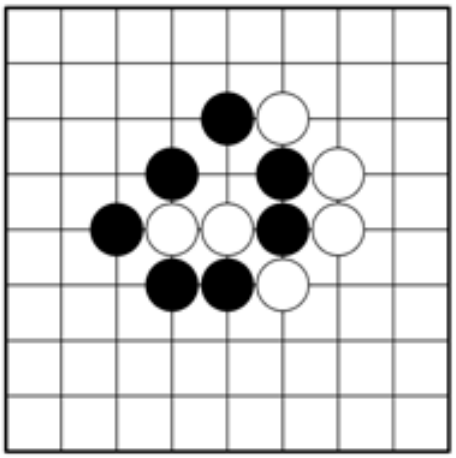
しかし、ここで改めて確認しておきたいのは「石を多く取ったからといって、必ずしも勝ちではない」ということです。

取った石（アゲハマ）は、あくまでも終局後に相手の地を埋めるためのもの。いくらたくさん石を取っても、それ以上に大きな地を相手に作られては勝てないということを、常に念頭に入れておいてください。

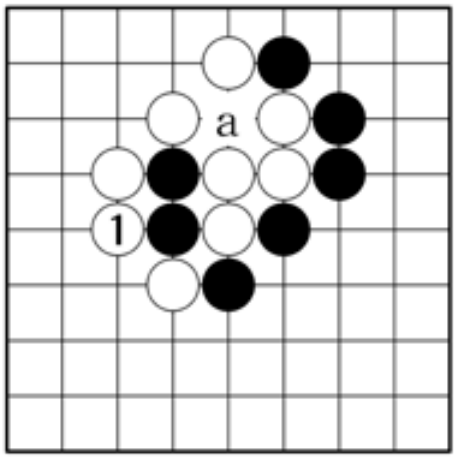
では最後に、問題二つで締めくくりましょう。黒白双方の立場で考えてください。



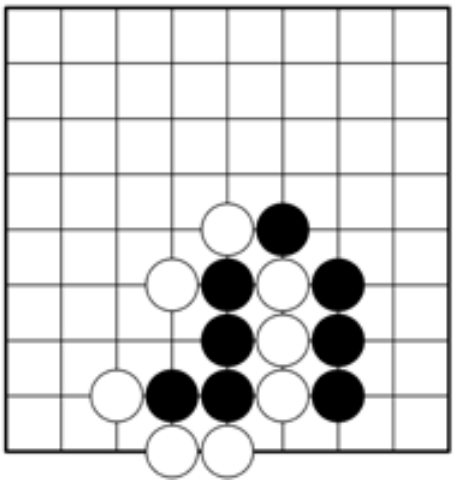
解答１の１



問題２



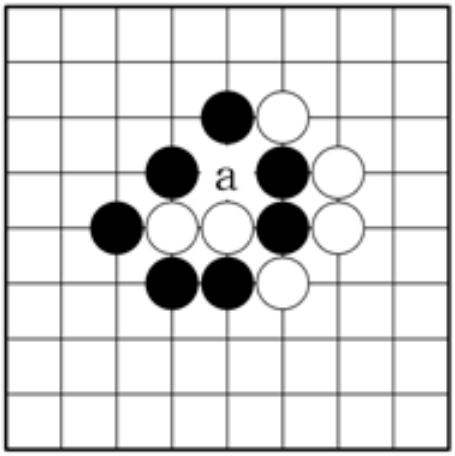
解答１の２



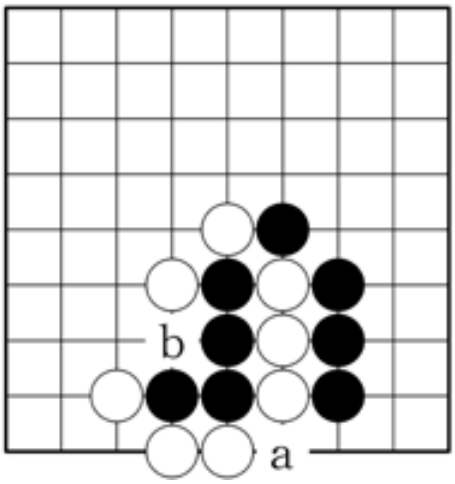
問題３

解答２　一見「着手禁止点」のように見えてしまい、気付きにくいかもしれませんが、黒の立場でも白の立場でも、ａと打てば相手の二子を取ることができます。

解答３　黒の立場ならａで白三子を取ることができ、白の立場ならｂで黒四子を取ることができます。



解答２



解答３

次回予告

今月の内容をもって、基本的なルールのお話はすべて終わりました。

というわけで来月からは、いよいよ実戦編に入っていきます。これまでの４回分でお話ししてきた「地」と「石の取り方」をドッキングさせるということです。

え、これだけでもう実戦？　と思われるかもしれませんが、心配はありません。これだけでもう実戦が打てるのです。

実際に私の周りの入門者の方も、最初は半信半疑ながら、いざ打ち始めてしまえば「囲碁ってこんなに簡単だったんだ！」とすぐに楽しんでくださっています。

皆さんも来月号では、その仲間入りとなります。大いに期待してくださいね。

指導者の方へ

次号から実戦編ということで、驚かれた指導者の方も多いのではないでしょうか。「石の生死や、コウについて触れておかなくていいのか？」と思われたことでしょう。

私は「触れなくていい」と考えています。詳しくは次号でお話ししていくつもりですが、簡単にその理由を説明しておきますと、

・これまでの４回分のルール説明だけで囲碁は打てる

からなのです。

実戦を経験したこともないのに石の生死やコウを説明されても、入門者は何が何だか分かりません。各自が実戦の中で「あれ、これは何だ？」と気付いていけばよく、その時に初めて指導者が「うん、これはね――」と説明した方が、理解度は遥かに高いというのが、私の経験による実感なのです。